

保育者養成における実習の意義（2） —学生にとってのPDCAサイクルの重要性に着目して—

福山 多江子・永井 優美

I. 研究の目的

本学の幼稚教育科は、幼稚園教員養成課程認定及び保育士養成課程認定を受け、90%以上の学生が幼稚園教諭二種免許・保育士資格を取得し、保育職に就いているという現状がある。平成14年には、文科省から幼稚園教員の資質向上に関する研究協力者会議から「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために—」という報告書が提出され、養成校においてもそのための課題が記述されている。

近年の学生の実習に対しては、観察・参加実習を行った後の責任実習において以前行った実習の反省点が生かされずに同様な指摘を園側から受けるという傾向にある。この点については実習後の振り返りを十分行うことによりいくつかの問題は回避できるのではないかと推察される。

又、平成27年12月21日に中央教育審議会の「これからの中学校教育を担う教員の資質能力向上について—学びあい、高めあう教員育成コミュニティの構築に向けて—」の答申において教職課程に関するPDCAサイクルが適切に機能することが必要であり、自己点検・評価の実施の制度化ということも記述されている。このことについては、教員もそうであるが、保育者となることを目的に養成校を巣立っていく学生にとっても授業や実習を振り返り、PDCAサイクルを適切に行っていくことが今後の実習や就職にもつながる重要な視点になるとを考えられる。

以上のこと踏まえ、今回の研究では実際に実習を行い終了した学生に対し、保育者の子どもに対する援助の仕方で参考になったことを省察させ、それについての事例や、学んだことを具体的に記述させるとともに、自己評価を10段階のスケールで示したアンケートに記入をさせることとした。このような振り返りを行ったアンケートを分析することで、実習についてどのような成果が見られ、それにより学生の保育に対する意識がどのように変化したかを考察することで、保育者養成においての指導の手段を以前より、より具体的に提示するための示唆を与えたい。そのことにより、学生の実習に対するPDCAサイクルがいかに重要であるかということも見えてくるのではないだろうか。そのため本稿では以上のような分析をし、PDCAサイクルの重要性を見出すことを目的とする。

II. 研究方法

研究対象：本学幼稚教育科平成25年度入学の学生

2年生183名

研究方法：幼稚園教育実習で責任実習を行った終了後に実習において学んだ保育者の援助の仕方を記述式にて記したものと、振り返りについての項目に回答したアンケートを基に、考察を行った。

研究期間：2014年6月16日～6月28日

10日間

III. 調査の結果

1. 学生の保育現場での学びの事例

(1) 「七夕の製作時の保育者の援助と声かけ」

七夕の「飾り玉」の製作活動の時間、保育者は、どのように製作をするかという一連の説明の後、子どもたちそれぞれが活動に取り組んでいた。

その中でB子は、折った2色の折り紙を貼り合わせるそのやり方を間違えたことに気づき、保育者にそのことを伝えた。その際保育者は、「綺麗に折るの、頑張ったね。色は交互になつていなくてもよいけれど、B子はどうしたい？やり直したい？」と尋ねた。その問い合わせに対し、B子は、「やり直したい」と答え、間違えた部分をやり直すことになった。

又保育者は、B子以外にもクラス一人ひとりの子どもに対して声かけを行っており、それぞれの作品や頑張った点などを見て褒めていた。決して「上手にできたね」と同じようなあり当たりの声かけではなく、その作品に合った言葉をかけていた。子どもたちは、自分の作品にどんなイメージを持ったかなど嬉しそうに保育者に伝え、それに対する保育者の言葉を受け、自分の製作した作品に満足していた。

⇒この事例に対する学生の考察

色を交互に折ることを忘れてしまったB子の声かけでは、まず子どもが頑張って製作を行った作品を認め、それから子どもの意志を尋ね、尊重していると感じた。私は、「このままでいいよ」と言葉をかけることが子どもを認めることになると思っていたが、保育者の声かけと、それに対して子どもが「やり直したい」と答えたことから「このままでいいよ」ということは伝えながらも、子どもがやり直したいのか、どう思っているのかという子どもの思いを大切にするという事を学んだ。

又一人一人をしっかり認めて褒めることが子どもにとって必要であると実際に感じることができた。

(2) 「トイレに行く場面（4歳児）」

保育者は子ども達にトイレに行くときは静かに走らないで行ってきてね。と声かけをし、トイレに行くときの注意を促していた。実習生はA君が泣いていると子ども達から聞き、A君に「どうしたの？」と声をかけると、「B君が大きな声で何度も言ってきた」と話してくれたという。実習生は自分では対応できないと悟り保育者に報告した。保育者が2人の間に入り話を聞くとA君がトイレに行くとき走っていたようで、それを見たB君はA君に何度も繰り返し大きな声で「走っちゃいけないよ。」と注意をしていたという。そのため、A君はだんだん悲しくなり泣いてしまったのであった。

保育者は一人ひとりと向き合いながら話を聞き、理解した上でA君には「トイレに行くときはどんなお約束があったかな？」と問い合わせ、「トイレにいくときは静かに歩いていくお約束があったよね。」と声かけをし、約束を破るとみんなに迷惑がかかってしまうことを伝

えていた。A君は分かった様子で、だんだん落ち着きを取り戻していた。B君には、なぜこのようなことをしてしまったのか聞き、強く言ってよいことと、悪いことがあることを伝えていた。「B君もお友達に大きい声で何度も言われたらどう?」と声かけをし、相手の気持ちを考えるように促していた。優しく注意すればよいことをB君に伝えたことで、A君とB君はお互い「ごめんね。」と謝ることができた。

⇒この事例に対する学生の考察

私はこのような時、強く言って友達を泣かせてしまったB君に気がいってしまうと思いますが、この保育者はA君にも「走ることはいけない。」とルールやきまりを守るように伝えており、とても勉強になりました。B君には自分がされて嫌なことを友達にはしないよう声かけをし、相手の気持ちを考えるように促していました。トラブルから相手の気持ちを考えるきっかけになるのだと学びました。集団生活をしていく上で、自分が中心ではなく、ルールやきまりがあって安全に過ごせることを、子ども達にしっかり場面に応じて声かけをしていく必要があると感じました。

この保育者は一人ひとりの意見や気持ちを聞き、受け止め、いけないことはいけないと子どもに分かりやすい言葉で伝えていることが分かりました。私も、子ども達が納得できるような声かけができるように、これからも保育者の声かけに着目したいと感じました。

(3) 「メロディオン練習の場面」

4歳児クラスにおいて進級をしてから毎日メロディオンの練習が行われていた。この日は、新しい曲を練習する日であり、保育者の見本を見て子どもたちは一生懸命練習に取り組んでおり、苦手な子も苦戦しながら頑張っていた。しっかり者のK君は負けず嫌いな性格であり、上手くいかないことがあると悔しくて悩み落ち込むことが多々見られた。この日の練習中、K君は一生懸命取り組んでいたのであるが、突然泣き出しちゃった。保育者や周りの子どもたちもなぜ泣いているのか分からず混乱が続いた。保育者は自主練習の時間をとることとし、K君に相対した。まず保育者はK君の傍に寄り添い、どうしたのか心情を聞いた。泣いているK君はなかなか話せず、保育者は見守っていたが、保育者はK君の様子を見て気持ちを代弁し、「メロディオンができなくて泣いちゃった?悔しかった?」と声をかけた。K君はうなずき「上手くできない。」と再び泣き出した。保育者は「K君?上手く出来なくていいんだよ。先生も上手く出来ないよ。でもね、先生は一生懸命頑張っているK君はかっこいいと思うよ!だから、一緒に練習しよう!」と声をかけた。K君は泣きながらも頷いていた。全体に戻り、保育者はK君に言ったことを他の子どもたちにも伝えた。保育者は「メロディオン難しいから、できる子とできない子がいると思う。でも、できないからやらないんではなくてできなくても頑張って練習している子は先生大好きです。一生懸命練習すれば必ずできるようになるから、焦らず自分のできるところから頑張って練習しましょう。」と話していた。

⇒この事例に対する学生の考察

今回の出来事は私自身とても悩みました。ちょうどこの日は実習最終日だったためK君の負けず嫌いな様子は薄々気付いていました。メロディオン練習時に最初からK君の傍にいた

私は様子を見守っていました。できないとも言わず不安な様子も見られなかつたため、突然泣き出したK君に私は戸惑いと焦りを感じました。そのような時に保育者が様子を把握し、K君と直接話をしてくださいました。保育者は子ども一人ひとりの性格を把握してその子がプラスに進めるよう促すことが大切であると実感しました。子どもは自分の気持ちを堂々と人に伝えることができる子もいれば、そうでない子もいます。それらを理解し、また、皆と共有することで一人の子の不安が周りの協力のおかげで軽くなることもあるのだと思つました。一人の子の話を聞き、代弁するのはもちろんのこと、全体に伝えることにより、クラスがまとまり、保育者との関係がより一層強いものとなるのだと思いました。できる子、できない子で評価するのではなく、目標に向かって一生懸命努力している姿を認めることで、子どもたちも自動的に頑張ろうと思うのだと感じました。これらのことから、日頃の保育者の対応や声かけが重要なのだと思いました。一人ひとりの性格や個性をすべて把握するのは大変ですが、とても重要です。それらに合わせた声かけや対応をすることで、子どもたちは保育者を信頼し、安心感を持つことができるのだと思いました。

(4) 「スコップの貸し借りの場合」

AちゃんがS君に「そのスコップ貸して」と言ったが、貸してもらはず、無理やりS君からスコップを取り上げようとした。するとS君がスコップでAちゃんを叩き、Aちゃんが泣いてしまつた。周りにいた子が保育者を呼んできて、今までのことを説明した。保育者はまず、叩いてしまつたことについて「スコップでお友達のこと叩いていいんだっけ?」とS君に質問した。S君が「ダメ」と答えたので、保育者は「そうだよね。Aちゃん痛かったんだって。どうしたらしいかな?」と聞いた。S君は「ごめんね」とAちゃんに謝り、Aちゃんも「いいよ」と答えた。続けて保育者は、「このスコップは誰のものなの?」とS君に問い合わせた。S君は「幼稚園のもの」と答えた。保育者は、「幼稚園のものなのに、S君だけが使っていいのかな?」と質問すると、「ダメだけど、使ったばっかりだもん。」とS君が答えたので、「じゃ、30秒Aちゃんと待ってるから、30秒数えたら貸してくれる?」と保育者が言うと、S君は納得した。Aちゃんにもこれでいいか聞くと頷いたので、保育者はAちゃんと手をつなぎ、30秒数えながら園庭を散歩した後スコップを貸してもらった。

⇒この事例に対する学生の考察

私は、保育者のようにスコップで人を叩いていいのかを聞く前に、「Aちゃんが痛かったんだって。ごめんねって言えたかな?」と聞いてしまうと思いました。しかし、Aちゃんに謝るだけで解決させてしまつたら、S君に物で人を叩いてはいけないということを伝えられないと気づきました。さらに、Aちゃんに「ごめんねって言おうね。」と強制するのではなく、保育者は、S君自身がお友達に痛い思いをさせてしまった時にどうしたらしいかを考え、行動に移すことができるよう声かけをしていました。私は、これまでこのような場面では「ごめんねって言えた?」とか「ごめんねって言おうか。」と言ってしまっていました。しかしそれでは子どもは保育者の言われた通りにしているだけになつてしまい、自分で気付いて行動に移すよりも、以上のような行為が身につきにくい結果になつてしまうのだと反省しました。今後は子どもが次にどうしたらしいか自分自身で気付いていけるような問いかけをし、トラブルを解決できるようにしたいと思いました。

(5) 「帰りの会の活動に参加せずに、お部屋の外に出ていってしまった子への対応の場面（5歳児）」

帰りの活動を行うために、教室で椅子を丸く並べて、支度の終わった子から順に椅子に座って全員が揃うのを待っていた。全員が揃い、保育者が前へ出て話を始めると、A君がテラスへ出ていってしまった。保育者の一人はそのまま帰りの活動を続け、もう一人の保育者がテラスへ向かった。この保育者はテラスに出ですぐにA君に話しかけるのではなく、テラスの掃除をしながらA君が危険なことをしていないか見守り、A君から話しかけてきたら、答えるだけだった。さらに、A君が棚の上にある遊具を取ってと頼むと、「みんなもうすぐお帰りのご挨拶しちゃうよ。A君はご挨拶しなくていいの？」と聞いた。A君が「挨拶はするけど、遊びたい」と言ったので、「じゃあ、6になったらお片付けするってお約束してくれる？」と聞くと、「うん」とA君が答えたので、30分になるまで待った。保育者は「あれ？ A君時計を見て遊ぶことできるかな？」と聞き、A君が自分から片付け始めたら、時間に気付くことができたことを褒め、A君とともに部屋へ戻った。

⇒この事例に対する学生の考察

A君は、ほかの活動の時も部屋の外に出ていってしまった。そのような時、私は「お部屋へ戻ろう。」や「みんな何してるのかな？」など、初めから部屋へ戻らなくてはいけないというような声かけをしてしまっていました。そうすると「嫌だ、戻りたくない。」と返事をされるばかりでした。しかし、今回の先生の対応だと、子どもも欲求が少し解消されるため、嫌だと言うことなく、みんなと同じ活動に戻ることができていました。保育者のこうしてほしい！という思いばかりを伝えて、その通りにしてもらうばかりではなく、子どもがその時に興味を持っていること、やりたいと思っていることを大切にし、その意見を取り入れ、欲求を満たしてあげることも大切だと感じました。しかし、朝や帰りの挨拶をクラス全員で行うことができるよう、時間を設定して部屋に戻ってくるように声かけすることも大切だと思いました。出て行ってすぐに子どもを追いかけると、鬼ごっこ勘違いをして、楽しんで逃げる子どももいたので、危ないことをしていないか確認しながら見守ることを学びました。このような対応をすることで、子どもは自分のやりたいことを受け止められると安心感を持つことができるのだと気づきました。

(6) 「砂場での自由遊びの場面」

新クラスになってまだ2か月しかたっていない4歳児クラスの砂場での自由遊びの場面の観察である。まだ一人遊びをする子が多いクラスであり、実習生が一人で遊んでいる園児を鬼ごっこに誘っても断られることが多い状況で、実習生は集団遊びへの展開を模索していた。砂場での自由遊びの時間には個人で遊ぶ様子が見られた。泥をチョコレートにみたててチョコ作りをするのが好きなMちゃん。砂場の近くにある大きな木の下で、木の枝をバケツに集めていたKくん。保育者は砂場でMちゃんと一緒にチョコ作りをしており、そこにバケツいっぱいに枝を集めたKくんが来て「先生みて？こんなに集めた」と言った。保育者はKくんに「たくさん集めたねー！せっかく集めたのだからそれを何に使おうか？」と言って、「先生とMちゃんチョコ作ったんだけど、Kくんの集めた枝にチョコ付けたら、ポッキーになるんじゃない？」と、いいことを思いついたときの笑顔で問いかけた。するとKくんは「ポッキー好

き！」と言い、Mちゃんも「作りたい」と言って一緒に作り始めた。さらにはポッキーができあがるとお皿に盛り付け、食べる真似をして楽しんでいた。

⇒この事例に対する学生の考察

私は一人遊びが多いクラスの中で、子ども一人ひとりから「○○先生こっちー」「先生○○してあそぼ」と声をかけられて、どのようにすればなるべく多くの子どもを巻き込んで遊べるのか悩みました。しかし担任の先生の言葉かけや反省会での話し合いから、無理にあせって集団遊びに誘う必要はないと分かりました。また、時には保育者が間に入り、声かけをすることでイメージを持つことができ、遊びが発展すると知ることができました。それを知り、私はいきなり集団遊びへと誘うのではなく、個々の遊びを細かく観察することにしてみました。

(7) 「お店屋さんごっこ」

女の子三人が保育室の隅で、おままごとで使用する野菜や果物やケーキなどを持ってきて机に並べてお店屋さんごっこを始める準備をした。三人のうち二人が店員の役をやり、残った一人がお客様になってごっこ遊びを展開していた。少ししてから別の場所でお店屋さんごっこをしているわけではないが、お金のおもちゃを使用して遊んでいるグループを保育者が見つけ、そのグループに「ねえねえ、そこでIちゃんとUちゃんとMちゃんがお店屋さんごっこをしているわよ。そのお金を持って行ってみましょうよ。」と声をかけ、そのグループと一緒にお店屋さんごっこをしている女の子たちの所へ行った。女の子たちはグループの子どもたちと保育者が近づいてきたことに気づき、「いらっしゃいませ～」と言った。そして保育者が「ここにちは、あの、このケーキはいくらですか？」と女の子たちに尋ねると、「このケーキは三千円です！」と女の子たちは答えた。すると「三千円だって、買えるかな？」とお金を持っているグループに問いかけた。「うん、僕が持っている。千円出せばよいのだよね？」「そうね、千円を何枚出せば買えるかしら？」とすかさず保育者が質問をする。「三枚だよ！」とグループのK君が答え、千円札を三枚保育者に見せた。「そうね、千円札三枚で買えるわね！じゃあそれをIちゃんに渡して。」と保育者が答え、K君に対しIちゃんにお金を渡すよう促した。Iちゃんは「はいどうぞ！崩れやすいので気を付けて持って帰ってくださいね！」と言いながらケーキをK君に渡した。それを見ていた保育者は「わあ、とっても美味しそうだね。買ってよかったです！」と言った後、グループの子どもたちに「他にも美味しいそうな食べ物があるわよ、皆で買って食べましょうよ！」と伝え、グループの他の子どもたちがそれを選んだり買ったりしていることを見届けるとそっと立ち去って行った。そのごっこ遊びは保育者が立ち去った後も続いていた。

⇒この事例に関する学生の考察

全く異なる遊びをしている2つのグループを、保育者の声かけ一つで遊びをつなげ、それにより子どもたちの遊びがより発展していったことに驚いた。私なら、それぞれのグループでそれぞれ楽しく遊んでいることに満足し、見守ってしまうが、この保育者はそうではなく、子どもたちの遊びの可能性を生かしてそれぞれの遊びをつなげていくことによって大勢で遊ぶ楽しさを自然な形で子どもたちに教えていた。今の私には到底思いつかないことのため、

とても勉強になった。

(8) 「砂場での並行遊び」

3歳児の6月の遊びは、並行遊びが多い。A男がコップに黒い湿った砂をいっぱいに入れ、それをひっくり返して砂のケーキを作つて遊んでいる。綺麗に型通りに砂が抜けたため、それを見せるために保育者を呼んできた。保育者はA男の砂ケーキを一通り褒めると、すぐ近くでA男と同じコップを使用して遊んでいるU男の所へ行き、「U男君もコップに砂を入れてひっくり返してごらん」と、A男の動きを興味深そうに見ていたU男に声をかける。U男は見よう見まねで砂を入れてひっくり返すが、砂がサラサラしているため、崩れてしまう。「何でA男君みたいにならないのかな?」と保育者に尋ねる。保育者は「A男君がケーキを作るの、上手だったわよね。どうやって作っているのか聞いてみたら?」とU男をA男のそばへ連れていく。A男が湿った砂で作ることを教え、保育者と三人で再度作り、綺麗な型通りのケーキが出来上がる。U男はとても嬉しそうにし、「黒い濡れた砂で作ると綺麗にできるね」とA男に話しかけ、その後、保育者の「他にも沢山違う形があるから、それを使ってみたら色々な形のケーキができるんじゃない?」という声かけにより、他の型を使用して二人で色々な砂のケーキを作り、楽しそうに遊んでいた。

⇒この事例に関する学生の考察

保育者は初めにA男の褒めてほしいという気持ちに気づき、受け止めていた。授業などでもよく見たり聞いたりする場面であるが、実際の現場で体験すると、子どもの気持ちの受け取り方や伝え方が本当に上手だと感動した。又、A男の遊びに興味があるがあまりやった事がないのか、なかなか行動に移せない様子のU男にさりげなく声をかけ、「じゃあ一緒にやってみよう」と、初めはU男が自分で考えるように促しつつ一緒にケーキ作りを行っていた。初めから答え(といっても子どもの遊びに答えはないのだが)を教えて促すのではなく、一度子どもに自分で考えて行わせ、「なぜだろう?」と考えるように促すことも、実際に見るととても難しそうに感じた。そして何より、U男とA男が一緒に遊ぶよう促す時の技術が凄いと思った。同じ場所、同じ物で遊んでいた並行遊びの状態の二入を無理にではなく自発的に繋ぎを持つよう促しており、友達と遊ぶという経験を少しづつ増やしていた。あくまでも保育者が中心にならないように声かけも工夫していた。

(9) 「積み木に無断で参加してしまう場面」

S君が積み木を高く積み上げている。そこにT君が「すごい!高い!高い」と言いながらS君が積み上げた積み木にいく。S君の「倒れちゃう!こっちに来ないで!」という注意にT君は耳を傾けず、笑いながら近づき積み木が倒れてしまった。保育者はこの一連の場面を見て把握している。

S君は保育者に「T君が来ないでって言ったのにこっち来て倒した。」と報告した。保育者は、「T君は倒したくてわざと倒したのかな?どう思う?」S君は、「ん一分からない。」「それじゃT君にどうして来ないでって言ったのに来ちゃったのか聞いてみるといいんじゃないかな?」S君はT君に「なんで来ないでって言ったのに来たの?」と優しく質問をしに行く。

T君は、「僕も一緒に積み木、高くしたかったの。ごめんね。」「いいよもうしないでね。じゃあ一緒に積み木で遊ぼう！」と、自分たちで謝り、仲良く遊び始めた。

⇒この事例に関する学生の考察

私はこのような時、見ていたことを全てS君に言って子ども自身で解決できるようにするのではなく、すぐに解決してしまおうとするが、この保育者は、子ども同士で解決できるように質問し、上手く誘導するとともに、子ども一人ひとりの性格、友情関係を把握し、S君がT君に対して悪いイメージを持っていないことを周知したうえで質問をしていた。又、保育者が謝るよう誘導しなくとも子ども自らの意思で謝っていたのは、日頃の保育者の保育の賜物であると感じました。実習中、この事例から私は子どもがこう育ってほしいというイメージ、目標を持って保育を行い、一年を通して子どもが目標に近づけるよう、担任の保育者は子どもをしっかりと観察・把握し、日々の声かけや行動に気をつけていることを学びました。私が担任を持つようになったとき、この事例から学んだことを忘れず、活かして自分の目指す理想の子ども像にむかって保育していこうと思います。

(10) 「着替えが遅くて次の活動に間に合わない場面」

ジャガイモ掘りをしてきて子どもたちは土と汗で服が汚れてしまったため、保育者は着替えるよう促した。段ボールから着替えを出して名前を呼んで子どもたちに配る。子どもたちは返事をして着替えを受け取ると着替えを始める。その中でCちゃんは一人だけ着替えが入っている巾着のひもで遊んでいた。保育者はそれに気づいているがあえて声はかけない。着替えを行っている子どもたちのボタンをとめるなどの援助を行っている。大体の子どもたちが着替え終わったのを見て、保育者は並ぶよう声かけをした。その声かけでCちゃんは着替えをしなければと気づく。保育者はまだ声をかけない。Cちゃん以外の子どもたちは着替えを終わって並んでいる。保育者は前に立ち紙芝居を読むことを伝える。そこでCちゃんは泣き出してしまった。しばらくしてから、保育者が「Cちゃん、泣いていてもわからないな、ちゃんとお口で言って」と声かけをする。Cちゃんは泣きながら「着替えができません。」と言う。保育者は「どうしてできないの？」と理由を聞く。Cちゃんが黙っているので保育者が「ずっとひもで遊んでいたからでしょう」「みんなと同じことをするのでしょうか？」と声かけをする。すると、Cちゃんは保育者に対して「手伝ってください」とお願いをする。保育者は「よく言えたね」とほめ、着替えを援助する。「次は一番にできるように頑張ろうね」と声かけをし、活動に合流した。

⇒この事例に関する学生の考察

Cちゃんが着替えをしていないことに気づいてはいたがあえて声をかけなかったのは、自ら気づかせるためだと思った。そこで保育者が声かけをしてしまったらCちゃんはこれからもずっと自分で気づくことができず自ら行動しなくなってしまうと思った。泣いてもわからないから口で言うことも伝えており、自分から行動を起こすことを伝えていた。皆が着替えをしている時に遊んでいたら自分が遅れてしまうということも気づけるよう促していた。それからCちゃんが保育者に対して「手伝ってほしい」とお願いできた時には優しく受け入れ、自分の口で言えたことを褒めて認めていた。こうすることでCちゃんは、次から自分の口で

言いやすい環境が作れるのではないかと思った。実習では多くのことを学んだ。それを自分が保育者になったときに生かしていきたい。

2. 学生による実習の自己評価

以下は「平成26年度 教育実習報告書」による学生自身の自己評価の一部である。項目ごとに0～10の評価スケールが置かれ、学生は実習後に自身の学びについて振り返っている(183名中172名、解答率94%)。特に(1)では「保育の方法や指導技術について学ぶことができましたか」、(2)では「実習を通して、保育者の役割を理解し、保育者を目指す気持ちをもつことができましたか」、(3)では学生による振り返りの自由記述を取り出したところ、以下ののような結果となった。

(1) 保育の方法や指導技術について

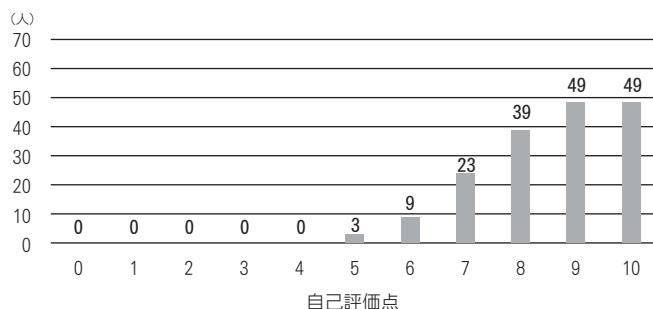


図1 保育の方法や技術指導について学ぶことができた

(2) 保育者の役割理解と志望の明確化

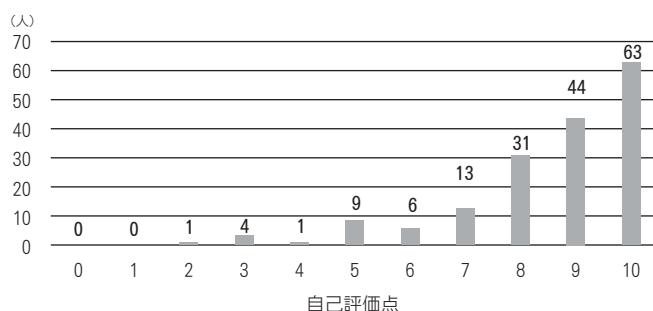


図2 実習を通して保育者の役割を理解し、保育者を目指す気持ちをもつ事ができた

以上の2点のグラフから、学生は自分自身ではおおむねこれらの項目については高い評価をつけている。

(3) 学生の振り返りにおける声かけと援助に関する自由記述

- ・先生が子どもたち一人ひとりに合った援助、声かけをする様子を見ることができた
- ・声かけは工夫する事がたくさんあり、その一言で子どものやる気に繋がることもある

ためポジティブな声かけをすることが大切である

- ・声かけには工夫が大切と学んだが、実際にすることが難しかった
- ・子ども一人ひとりに合ったことを伝えられるよう言葉の数を増やす
- ・対応に難しい子や自分なりに声をかけてもどうにもできないこと
- ・子ども一人ひとりの特長を掴み、一人ひとりに合った声かけや援助を行う
- ・責任実習での反省点を振り返り、何が悪かったのか、どのような声かけがよかったのかなど、しっかりと解決策を見つけること
- ・次の行動に移る際、たとえ当たり前になった習慣の時でも、声かけをかかさないこと
- ・トラブルがあった時には、まず子ども自身から話を聞き、出来事の全体を把握し、子どもの気持ちに共感しながら、相手の気持ちも考えられるような声かけを行い、解決に促していく
- ・活動の声かけを全体に行ってから徐々に個人へと声をかける
- ・子どもたちのふとした瞬間の表情の変化に気づいたり、子どもたちが出してきたSOSにしっかりと応えてあげる援助
- ・けんか等が起きた際に、毎回仲裁に入るのではなく時には見守ることも大切だという援助
- ・自分の周りにいる子どもたちだけでなく、クラス全体の子どもたちに配慮して援助すること
- ・一人ひとりに合わせた援助方法
- ・保育者の声かけは一つ一つが大切で、年少や年中の場合は何をするのかを伝えられると行動できるので、聞く態勢ができている時に伝えることが重要である
- ・保育者の声かけによってクラス全体が変化する（プラスの声かけが必要）
- ・保育者の声かけ、援助の仕方など、一つ一つに意図やねらいがあるということ
- ・年齢や発達をふまえてどのように保育者が子どもたちを指導しているのか、またその声かけ（製作をする際に子どもたちがわかりやすいように伝わりやすい言葉で話す）というような援助の仕方

IV. 考 察

1. 学生の保育現場での学びの事例

事例のように多くの学生が実習での体験を通して、実際の保育者の子どもへの声かけや援助の在り方を学んでいる。保育現場で子どもと保育者の姿を観察しなければ子どもの思いに寄り添い共感し、適切に援助する保育者の在り方は学ぶことはできないといえる。又このような視点で保育者の援助の仕方を学ぶことができることはこれまでの短大での授業を通した学びや様々な実習での経験の積み重ねによるものであり、保育実践を重層的に捉える視点が養われていると考えられる。これから指導に対しても子どもの思いに敏感に気づくことが可能になるような実際の遊びの場面や保育者の保育の中での声かけや援助などの視聴を取り入れ、考察ができるようにする事が重要となる。

事例 6 では、学生は気づきの後、反省を実践に生かし、次のように記述している。

砂でケーキを作っていたSちゃん。チョコ作りをするMちゃん。そしてその近くで一人で車のおもちゃ（台車のようなもの）を押していたRちゃんがいました。Sちゃんがたくさんのケーキを作っていたので「すごいね！このケーキ何ケーキ？」と問いかけると「葉っぱにのせていろんなケーキにするの」と言うので、「Mちゃんのチョコレートをかけたらチョコケーキもできるんじゃない？」と提案すると「チョコもほしかったの。Mちゃんちょうどい？」と言って二人は一緒に作業はじめました。私は葉っぱを探しにRちゃんを誘って車に葉っぱを集めて乗せ、MちゃんとSちゃんのところへ戻りました。するとチョコケーキができるがっていたので「この葉っぱにのせて、Rちゃんの車で配達してもらう？」と提案すると、「うん！それならJくんケーキすきだからみんなで届けてあげよう」とSちゃんが言ったので配達屋さんごっこへと展開することができました。

事例 8 では、学校での授業の学習を基盤に、実際の現場での体験から子どもの気持ちの受け取り方や伝え方を学び、次のように記述している。

保育者は初めにA男の褒めてほしいという気持ちに気づき、受け止めていた。授業などでよく見たり聞いたりする場面であるが、実際の現場で体験すると、子どもの気持ちの受け取り方や伝え方が本当に上手だと感動した。

事例 9 では、日頃の保育者の保育の積み重ねにより、それぞれの子どもの性格や行動を的確に把握し、それを日々の保育に生かしていることを学び、学生自身が保育者になったときにこの学びを生かして自分の目指す理想の子ども像に向かって保育したいと記述している。

この事例から私は子どもがこう育ってほしいというイメージ、目標を持って保育を行い、一年を通して子どもが目標に近づくよう、担任の保育者は子どもをしっかりと観察・把握し、日々の声かけや行動に気を付けていることを学びました。私が担任を持つようになったとき、この事例から学んだことを忘れず、生かして自分の目指す理想の子ども像に向かって保育していくこう思います。

2. 学生による実習の自己評価

(1) 保育の方法や指導技術について

グラフから分かるように、約80%の学生が実習において保育の方法や指導技術について学ぶことができたというスケールで、8以上をつけている。

このことは前述と同様、実習が学生にとって短大での学習を基盤に、実際の現場に出ることにより学びをより深めていることが読み取れる。

(2) 保育者の役割理解と志望の明確化について

このグラフから実習を通して、保育者の役割を理解し、保育者を目指す気持ちを持つこと

ができたと 8 以上をつけた学生は、約80%であった。

この 2 点のグラフから、学生は自分自身でこれらの項目について概ね高い評価をつけていることが読み取れる。

(3) 学生の振り返りにおける声かけと援助に関する自由記述

学生の保育者となることへの意欲や自信が表れているといえよう。自己課題に向き合う中で、学生が成長していく過程が重要である。特に、同報告書からは学生が実習において声かけの重要性に気付いていることが読み取れる。保育者の声かけにより子どもの行動や感情がどのように変化していくかに気づき、日常の保育の基本である子どもの心情・意欲・態度を尊重しながら保育をしていく重要性に視点が確実に向けられていることが読み取れる。声かけが保育の場面で必要な力量であることを学んだといえよう。また、援助の在り方も同様である。一人一人に合わせた援助方法や、子どものふとした表情の変化にすばやく気づき、子どもたちの出した S O S にしっかりと応えてあげることなどの援助の大切さもあげている。この気づきや実際に行動に移すことの難しさのため、悩み、葛藤を抱く学生も多いが、それを自らの課題として捉え、前向きに実習に取り組んだことが読み取れる。

V. 結 論

以上の結果から学生の実習における振り返りは、保育者として現場に出てからの大きな指標となることはといえよう。

保育者がそれぞれの保育場面（朝の自由遊び・朝の集まり・主活動・昼食・昼食後の自由遊び・お帰り）で適切な援助をし、それに伴った声かけを子どもに向けて行うことを観察することは座学では学ぶことのできない経験である。しかしこの学びを確立するためには、短大で学ぶ、5 領域、子ども理解や心理学などの一般科目・専門科目を確実に理解することが必要であり、それにより学生それぞれの視点が定まり、実習を行うにあたっての目標が立てられるのである。ゆえに学生自身の実習においての目標が日々の学びから定められ、それを基盤に現場を経験し、保育者の声かけや援助の重要性を学生なりに理解し、実習後に振り返りを行うことは、これから保育者になるにあたって重要であるといえる。

そこで、これらの結果を考察し、得られたことを踏まえ、学生にとっての PDCA サイクルを示すと以下の図のようになる。

学生にとっての P D C A サイクルの重要性

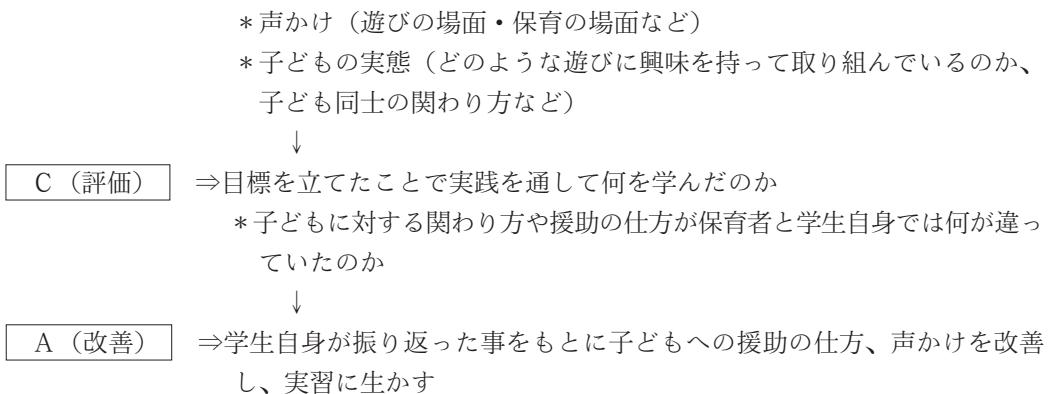
P (計画) ⇒ 保育の実習現場で何を学びたいかの計画を立てる

- * 保育者の援助
- * 声かけ
- * 子どもの実態など

↓

D (実践) ⇒ 計画・目標を立てた事に関して観察を行う

- * 保育者の援助



注：このPDCAサイクルを繰り返し行うことによって、学生自身の実習がよりよいものとなる（このことは、事例によって明確に理解することができる）。

このように短大での学びを基盤とし、それをもとに実習における目標（何を学びたいのか）というPの部分を学生自身が定めることができることで、実習における指標が定まってくると考えられる。

そして、計画・目標を立てたことを観察・実践することで、学生自身が定めた指標がどの程度行うことができたかDの部分が明かになる。

次に学生自身が目標を立てたことが実践を通してどの程度達成されたか否かを振り返る。例えば実習における子どもに対する関わり方や援助の仕方が保育者と学生自身で何が違っていたのかなどを省察することでCの部分が確立される。

それにより、学生自身が振り返り学習し、省察したことをもとに子どもへの援助の仕方、声かけを改善し、再び実践に生かすAの部分が見い出され、それにより、よりよい実習へと改善されていくということがこの研究の結果から得られたといえよう。

この4つのサイクルが何度も繰り返されることにより、学生自身の目標とする保育者像が確固たるものとなり、子ども一人ひとりに対する援助や声かけ、また保育の仕方も確立されていくことが読み取れた。

今後は、振り返りの重要性を見出したことで、指導における指標が見えてくることが予想される。この結果をもとに教員の指導の指標を研究し、学生がよりよい実習が行えるよう、研究を続けていきたいと考えている。

参考文献

- 文部科学省「幼稚園教員の資質向上についてー自ら学ぶ幼稚園教員のために」平成14年
- 中央教育審議会「これからの中学校教育を担う教員の資質能力向上について～学びあい、高めあう教員育成コミュニティの構築に向けて～」平成27年
- 福山多江子・大塚良一・田中浩二「幼稚園実習のスキルと責任実習での傾向と課題（そのⅠ）－東京成徳短期大学の幼稚園実習アンケートから－」『東京成徳短期大学紀要』第46号、2013年3月、39-47頁。
- 福山多江子・永井優美「保育者養成における実習の意義—実習の振り返りから見る学生の成長（1）－」『東京成徳短期大学紀要』第48号、2015年3月、55-70頁。